

Blowers

27止

帝國海軍
橫濱航空技術廠

Final Troop 結果発表

戦闘の舞台はいつのまにか前線とは関係の無い方面に広がっていた。純軍事的な意味において両軍の備えはほぼ拮抗していたが、それを支える部分で東側の方がより薄かったのである。衛星国が勇み足に出たその代償は、決して安くはなかった。

それでもこの紛争でアドバンテージを取っていたのは、常に東側だった。最初の一弾を放ったのは東側である。戦場を選べる立場にいたのも東側である。そして、戦の終了を告げたのも、東側で起こった突発時からだった。

西側では新潟へ向けて陸海空軍の展開を終えた頃から、東側の抵抗が急に散漫になり始めた事に気が付いた。当初はこちらをより敵の懐深く誘き寄せる筈だと、謹しも思った。ところが東側の実態はそれどころではなかったのである。

そもそもの契機は天童で起こった食料騒動である。

東側の「お約束」通り、この年も例年通り食料の配給はおよそ「まとも」とは言えないレベルに抑えこまれていた。それが今度の紛争で軍需が増大し、配給分がそれだけ削りこまれる事になった。事ここに至り人民の怒りは暴発した。天童が震源地になったのは単なる偶然にすぎない。相前後して、東北地方各地で同様の食料の略奪が始まり――それは数百年前に同じ地域で見られた「一揆」とまったく同じ形態で、同じ経過をたどった――、数時間を経ずしてうちいくつかが政治テロにエスカレートした。

悪い事に前線に精鋭兵力が引き抜かれていた分、こうした「銃後」の治安力は相対的に低下していた。仙台、山形など県庁所在地はともかくとして、その他地方都市では治安出動したはずの部隊までが略奪に加わる悪循環が呈された。県庁所在地でさえ、崩壊は時間の問題だった。

青森の暴動が放送局を占拠すると、暴動は海を越えて北海道へ伝わった。しかし幸か不幸かこの放送局は地方局だった事も有り、両館まで届いた電波も西側圏までは届かなかった。地対艦ミサイルの脅威は依然として残っており（実態はともかくそう見られていた）、西側艦船は近寄れずにいたのだ。彼ら反政府勢力の「声」

が直接西側に届くには、反乱の最終局面で札幌のAM局が寝返るまで待たねばならない。

東側政府は破局を自ら意識した。政治家個人が自身を守る為にやるべき事はただ一つだった。

降伏である。

間一髪で企みは成功した。政府首脳はヘリコプターで仙台を脱出、沖合いに待機していた自前の駆逐艦に乗り換えて西側制海権下に入り込み、白旗を上げた。だがその頃までに白旗には何の意味も持たなくなっていた。仙台の反乱勢力がその1時間ほど前、ラジオ放送によって政権の掌握を宣言、戦闘状態の即時停止を敵味方双方にわたって伝えたからである。

一発のミサイルで突然引き起こされた戦争は、一粒の米の為に突然、幕切れを迎えた。

後日...

東日本の領域を併合して統一にわたった日本国内は、やがて経済的には東側の慢性的な不況をも背負い込む形となってインフレと失業問題に苦しめられ、外交的には歯舞、国後、色丹、礼文のいわゆる「北方四島」に駐留していたロシア軍の撤退をめぐって延々と答えのない泥沼外交を続けることとなる。

15年の長きに渡って続いたいわゆる第二次世界大戦と、それに続く50年に及ぶ冷戦はようやく終わりを告げた。歪みに歪んだ外交問題と、これがもたらした種々雑多な歪みは一気に火を吹き出し、世界の構成は急速に変容し始めた。混乱の中、イエールはイザベリア公国と再び合併し、そのイザベリアは時の大公ラ・サムナー15世が自ら共和制への移行を宣言するに及び、2000余年におよぶ歴史に終止符を打った。

第二次世界大戦において、勝者はいなかった。

- A-Strike -
The end.

プレイヤーの状況

戦闘が行われなかった為、ポイント等の増減は一切ありません。

編C後記

長きにわたって続いた拙作「A-Strike」も、今回で終わりです。正直言ってここまで続くとは思いませんでした。現在これを書いているにあたって散逸した資料の多さに自ら時の流れを痛感する次第です。既に種明かしをしてあるとおり、当初予定していた「エンディング」はこれとはまったく違った、非常にSFチックな物でした。……あれから、いろいろな事が有りました。ベルリンの壁が無くなり、東ドイツが西ドイツに併合され、不滅とも思えたソ連はいともあっけなく崩壊してしまいました。当時別件でつきあっていた白杏さんが、別の記事の設定の件で「ソ連が21世紀には無くなっているかもしれない」と私信に書いていたのを私は軽く受け流したのですが、それから何年と経たずにそれが実際の物となってしまったのは、ショックとしか言い様が有りません。

内輪でもいろいろな事が有りました。空技廠の母体となった「SHIFT」が、スタッフの進路が異なっただけでいともあっさり音信が途絶えてしまい、自然消滅してしまったのも一つです。基盤を提供してくれた「Game Graphix」が唐突に―――あまりにも唐突に、姿を消したのも一つです。目標、あるいはライバルと目していた草の根の「戦友」も、今では一人として残っていません。

思えば遠くまで来た物です。潮時、という言葉集が適当ならば、第二次世界大戦後50年目の今がそうかもしれません。現在行われている草の根のPBMを見渡してみると、A-Strikeのような、いわゆる「リスト型」のものは非常に希、というか無いといって過言ではないでしょう。ほとんどはキャラロールを中心としたRPG的な、「真鶴」のような「小説型」の物ばかりです。その中で空技廠が「リスト型」のPBMを曲がりなりにも続けて来た事は象徴的な意味を持っていると思います。その意味を込めてA-Strikeを

Blowersに吸収した後も常に「一等」のランク付けを行っていた訳です。

しかし、もう、限界です。そろそろ老体は表舞台から退くべき時でしょう。

最後に、この非力なGMに最後まで付き合ってくださった皆さんに、心から感謝の意を表します。

合掌

1995年3月28日

帝國海軍横濱航空技術廠

主計少佐 菊地研一郎

参考資料

Aircraft (I-204)

航空情報別冊 太平洋戦争 日本陸軍機

航空ファン別冊 第二次大戦ドイツ軍用機

同 日本陸軍機全集

同 日本海軍機全集

同 第二次大戦米陸軍機全集

同 第二次大戦米海軍機全集

グロリアス・ウイングス I

ミリタリー・イラストレイテッド・シリーズ

別冊歴史読本 日本陸海軍航空隊総覧

臨時増刊 歴史と旅 太平洋戦史総覧

函解 世界の軍用機史 1・2

文芸春秋 1990年12月号

航空ファン

航空情報

エアワールド

世界の艦船

防衛庁戦史資料室資料集

防衛年鑑

自衛隊装備年鑑

EXPLORER WOMAN RAY

GHOSTS

資料提供

世田谷学園中学高等学校図書館
 駒沢大学図書館
 横浜市立港北図書館
 東京都立日比谷図書館
 石堂書店 妙蓮寺店
 ボラーノ書林
 オレンジキャット 池尻大橋駅前店
 オレンジキャット 駒沢大学駅前店
 廣文堂
 高岡書店
 三省堂渋谷店
 書泉ブックマート
 書泉ブックセンター
 八重寿ブックセンター

印刷所

セブンイレブン 三宿店
 同 妙蓮寺店
 同 仲手原店
 ファミリーマート 明石屋加藤酒店
 ローソン 白薬店
 ハタ楽器
 世田谷学園中学高等学校職員室
 駒沢大学体育館1F
 駒沢大学図書館 参考係事務室

使用ハード・ソフト

リコー マイリポートN-10
 EPSON PC-486HX2
 EPSON PC-386NAR2
 EPSON MS-DOS Ver.5.0 Rel.2.0
 EPSON MS-WINDOWS Ver.3.1
 ナムシンググッド Newオーロラエース
 ジャストシステム 一太郎Ver.5/JW2
 ジャストシステム 一太郎Ver.5/Windows
 Lotus Ami Pro R3J,R3.1J
 Lotus 1-2-3 R2.4J,R4J,R5J

Greatly thanks to:

赤木崇敏 秋信敏男 阿曾喜徳 安倍唯
 井村和正 植田博志 遠藤誠 迫木健 片岡義経
 勝本充司 河村芳行 菊川智範 吉楽征二
 木下博昭 蔵田昌弘 栗原大輔 黒須俊行
 軍司栄一 寿司 小西清彦 境一憲 酒庭一朗
 篠原崇 清水和宏 下永弘典 白杏 菅原忠幸
 杉浦壽昭 鈴木敬純 炭谷英範 曾根田成弘
 高橋慎哉 高山秀樹 田中真人 武田一敬
 ただのりな 佃聡 戸島基貴 富田周二
 豊田佳明 中西義勝 中野貴志 永山真時
 謎の黒幕 根本吉重 野口忠 羽村明仁
 林孝始 P. TAN 日高耕 日比野憲治
 布家良太 古橋道生 降矢浩己 洞太助
 堀尾章太郎 松下泰之 水野谷滋久 三谷一之
 村松雅和 森田欽也 安田好宏 八幡和男
 山田国見 山田雅夫 横山友紀 和田保繁
 (敬称略・五十音順)

Also Thanks To:

Game Graphix
 ただのりな
 キリー・タカラ
 境一憲
 田中真人

※本名を明かすのが適当で無い場合、あるいは本名不明の場合については、紙上でのペンネームをそのまま用いた。また上記以外にも、既に資料が散逸していて詳細はあらかわせないが、資料照会や表紙絵描きなどだけでシナリオに直接参加しなかった方が数十名いた事も記憶にとめておくべきである。彼らもまた、まったくの初心者である私に対して、貴重な経験則を与えてくれた。この場を借りて深く感謝の念を表したい。

制作

帝國海軍横浜航空技術廠

真鶴学園風雲録

3月1日、学校側から何気なく発表された情報は、次の瞬間、全校生徒を混乱の渦に陥れた。

艦隊派、全員浪人。
職員室横の壁に合格者名簿が大学別に張り出されるのはこの学校が進学校であることを思い起こさせる光景の一つだが、その中に艦隊派の受験生7名（榛名、はるな、南雲、山城、長門、扶桑そして霧島）の名前が無い。

ありえない事だった。

栗田榛名以下艦隊派を構成する者と言えば、DMもさることながらいわゆる「学業」でも粒ぞろいの優等生で公開模試では常に上位に位置し、榛名などはしばしば学校から表彰されていた程だ。実際彼らは文系特別や普通科に在ながら、エリートのはずの理数科を抑えて学校トップを争っていた。それが全員浪人した。口の悪い後輩達は高望みと軽くあしらったが、そうではない。一律30点の「下駄」を与えられる、系列の用賀大学でさえ彼らは不合格で、更にはもっと下の明らかに「滑り止め」の所にさえ、彼女達の名前は一人として載っていないのである。情報通の間では、「用賀では一点だけ足りなかった」とのおまけまで付いていた。

彼女らに続く「優等生」達は狼狽した。明日はわが身か。

中で一人だけ冷静だった者がいる。
「馬鹿野郎…」7つの名が無い掲示板をじっと見上げたまま、彼女は両の拳を固く握り締めた。「余計な事を…」

雪風に「神器」を返しておこう。

菅原がそう提案したのは3月上旬である。特に理論立った考えはない。ただ、有るべき物は在るべき所へ、そんな心理が働いていた。もちろんみんな同意した。反対すべき理由も無かった。

巴御前は現れなかった。だが、彼らは艦長室のテーブルに、4つの神器を並べた。

「結局、5人目は誰だったんだろう」

初雁がその様を眺めて、呟いた。

「この船消えた時…恨まれるかな、私達」

朝比奈がそれに応える。

「そんな事はないと思うけど」初雁は言いながら、艦長室を後にした。つられてアーティや菅原も外に出る。「感謝もされないだろうね」

巴御前を出てこない雪風は、何か物足りなさを菅原に与えるのだった。どこか埃がかったような感じさえ…

帰り際、菅原は意を決して初雁に頭を下げた。
「好きです。付き合ってください」

漫画だったら大きく弾ける波頭が描き込まれる所だ。後ろを歩いていたアーティ、朝比奈が呆気に取られる。初雁も立ち止まって、菅原の目を見つめた。初雁の方が背は少し上だったから、のぞき込まれるような感じは一層強くなる。

「はい」

彼女の答えはしごくあっさりしていて、これといった感情も何も感じられない。ふと気が付くと、事情がよく飲み込めない朝比奈がぼうっとなっているのはともかく、アーティは腕組みして得心したようにうなずいている。

「はいって…」菅原はかえって狼狽した。「…え?」

菅原にとっては不自然なくらい、初雁は落ち着いていた。出口に向かって歩き出す。

「シラケテンノヨ!意外ト鈍イノネー!」アーティが立ち止まったままの彼の横腹を小突く。「今サラ propose シテ、ドウスンノヨ?今ノ situation、マルデ変ワンナイノニ? Incredible!」

また初雁が振り返った。

「私、とっくにそのつもりだったけど…今までみたいじゃ嫌かな…」

セリフとしてはこちらの方が破壊力は大きかった。役者が違う。菅原は急速に言い様のない敗北感に沈み始めた。

「でもね、」彼女は急に菅原の片腕を取った。空いている方の手で彼の頬をつつく。「…それが、あなたの、いいと・こ・ろよ」

彼は思わず赤くなった。アーティが口笛ではやす。

ずいぶん経ってから、腕を取ったままで初雁はこう付け足した。

「うれしかったわ…初めてよ、ちゃんとやってくれたの」

幸せと困惑とがない交ぜになって、菅原の視線は宙を泳ぐばかりだった。

若宮紫波はふたたび雪風の洞窟へ「実地検分」に行った。本当にターンテーブルが有るのだろうか?こんなに菌ごたえのある物だとは思ってもしなかった。

今回彼女は、安い（と言っても彼女にとって）GPSと方位磁針、それに毛糸玉を用意して行った。毛糸を繰り出しながら歩いて行けば、ターンテーブルの向きが変わればすぐわかる。保険のつもりだったが、すぐにこれが本命になってしまった。

GPSは洞窟の少し奥に入っただけで電波が弱くて測定不能になってしまったし、方位磁針はどうした訳か動きが不安定になってしまったのである。気にするほどでもないのだが、素掘りの洞窟を方位磁針だけ見て歩いて行くのは危険極まりない。

何かもう、ギリシャ神話みたい。

くたされてそんな事を思った矢先、彼女は洞窟の広い扉へ出た。そこが雪風だった。

???????

毛糸がどこにも引つ掛かっていない。若宮はいよいよ訳が判らなくなった。まっすぐだったのかな?そんなはずも無いけどなあ...まあ、帰る時にかかるかな。彼女はそのまま艦内にあがった。

前に櫓達と出くわした時に比べて、艦内はどことなくくすんだような感じを受ける。だが汚れている訳ではなく、むしろ「疲れている」感じた。

今度ほうきでも持ってこようかな...

彼女はそんな事を考えながら、艦内の廊下を巡った。

少し休もうか、と彼女が前甲板へ上がって行った時。時間が止まった、様な気が、彼女にはした。

そこでは白い作業服姿の水兵達が、もくもくと紫煙をふかしていたのである。一人や二人ではない。学校で言えば一クラス分はゆうにある人数が、一番砲塔から先の狭い船首楼上に集まって、思い思いに休憩しているのだ。やがて彼女の存在に誰となく気付き、視線が集中した。古参風の下士官があごをしゃくると、一番若く見える水兵がすっ飛んで来た。

「どなたを御探しですか」

警戒しているのは顔を見ずとも声ですぐにわかる。若宮は返答に詰まった。

「あの...」

「君、その子は私の姪だよ」

背後から太い声がする。振り返ると士官——艦長らしい——がいつの間にか立っている。任せろ、と言いたげに彼はうなずいた。

「申し訳ありません、艦長」

水兵は慌てて艦長に向かって敬礼した。

「いや、いいんだ。私が目を離したのが悪かっただけだ」

促されるままに、若宮は前甲板を後にして、無味乾燥な艦長室に入った。

「さて、要件をうかがおう。ここは普通の民間人が来てよい場所ではないからね」

民間人?一体、何様のつもりだろう?そう思った矢先、彼女はひらめいた。

「今日は何日ですか?」

「...変な事を聞かお嬢さんだ」艦長はいぶかしがった。「昭和46年、12月8日だが?」

?????

最初はふざけているのかな、と思った。しかしそれにしても妙にリアリティがある。昭和46年が本当の話だとしたら...雪風が戦後中国に賠償艦として接収された事は知っている。日本人がこの艦を管理しているはずはないし、第一こんな所にある訳が無い。

「私、防空壕に入ったんです」何とかして事態を把握しよう。時間を稼がなくては。「それが迷っちゃって...」

「それはいけない」艦長の声は優しくしたが、顔つきを見るとまた険しい。「外へ案内させよう」

若宮はあ、と声を上げそうになった。艦長の制服が海上自衛隊の物である事に気がついたからだ。それも古いデザインの物だ。もちろん制服などいくらでも作れるから、これが即ち昭和46年の証明にはならないが...じゃ、タイムスリップしたんだ?SFみたいご?

「何でこんな所に戦艦が置いてあるんですか?」
「君、これは戦艦ではないよ。駆逐艦で、雪風と言う」

努めて「何も知らない女子高生」を装って身の安全を図ろうとした若宮の企みに、艦長は乗ったようだった。

「太平洋戦争の時に日本の艦として戦っていたのだが、終戦で中国に賠償艦に取られた。それが今年、老朽化した事もあって日本に返還される事になったのだが...」

艦長はそこで辺りを見回した。

若も知っているだろう、今は反戦団体が一つの流行のようになっていく。アメリカは30年前とまったく変わらん。力だけが正義だと信じて、ベトナムで無駄な血を流し続けているが、あんな馬鹿げた事はない。何も知らない平和主義者達は、戦争即悪だと思っているようだが、それも違う。だが、違う事を違うといっはならん時代が、今のだよ。あの戦争の頃と一緒だ」

「はあ」

「そんな所へ、あの戦争の時の遺物を表に出してしまえば、どうなるか。反戦団体はスクラップにしたがるだろうし、良くて反戦のシンボルにしたがるだろう」

艦長は若宮の眼をちよつとのぞきこんだ。

「戦争の為に造られた艦が、反戦のシンボルとは皮肉な話だ。一方で、近視眼的な奴が多い右翼は、あの戦争を賛美する為のシンボルにするだろう。——ちよつと、横須賀の「三笠」のように」

三笠は若宮も見に行つた事がある。外観はペンキの厚化粧でもおもちゃのようであり、中に入つて見れば三笠の戦歴はどこへやら、何だか海上自衛隊の広告塔のようになってしまっている。雪風の柄じゃないな、というのは判る気がした。

「我々生き残りの乗員は、雪風をそのどちらにもしたくなかった。ただ歴史の生き証人として、残しておきたかったのだよ」

あれ?雪風は昭和44年夏に台風で大破着底してスクラップになつたんじゃないか?

「...新聞で見たんですけど雪風って、帰つて来たのは錨と...何だつて...」

「それはあくまでも表向きの話だ。政府が決定した事で、この雪風は、いずれ国民全体がああ戦争を冷静に見つめる事ができるようになつた時、我々乗員からの、そして海で戦つた男たち全員からの記念品として、その存在を明らかにする事になる」

「...凄い...」

「お嬢さんが大人になつた頃に、出せれば良いのだが...」

艦長は不意に伏し目がちになつた。

今の様子を見ていると、それは多分難しいだろう。そうなる今度はこの雪風を秘匿している事、その行為自体が歪められて解釈される事になりかねない」

それは判るような気がした。榛名や初雁達が遭遇している「混乱」の事は若宮は知らないが、一つの事件が時間を追ってたくさんの解釈を生むのは、日常生活でもさして珍しい事ではない。

「今君がここに雪風が存在する事を言ったとしても、多分、信じてもらえないはずだろうが、万が一と言う事がある」艦長はまた若宮の目を見た。隣れみに満ちた目だ。「君はこのフネを見てしまった...見てはいけない物を」

艦長がいつの間にか手に自衛拳銃を持っているのに気が付き、若宮はたじろいだ。

「今の話は冥土の手土産に持って行きたまえ。戦死した連中が喜ぶだろう」

銃声が出た。

気が付くと、若宮は手ぶらで誰もいない洞窟に立っていた。雪風は相変わらず毅然とドックに居る

座り、黒く光っている。ぼうっとした面持ちで、彼女はその後を後にした。

私は一体何なのか。それを確認する為に坂井法子が雪風の洞窟に入ったのは菅原達が雪風に「神器」を返納した翌日だったが、もちろん坂井はそんな事を知りようも無かった。

「あの日」以来、関り合いにはなるまいと誓った二名を聞く事すら嫌悪した「雪風」へ、「真実」を探しに。「記念写真」やなお続くあの悪夢の残像が、彼女の足を雪風へ向けさせたのだった。あのフネが全てを握っているのなら、…行くしかない。

雪風にたどり着く事は困難ではなかった。否、たどり着いたのではなく、体育館裏のマンホールを降りきると、そこが既に雪風の地下ドックになっていたのである。

そして驚くべき事には、雪風の上甲板で見慣れない人影が歩き回っていたのだった。一人や二人ではなく、大勢だ。別に無目的に歩き回っているのではなく、それぞれに何か目的を持って「働いている」といった印象である。そして、誰も雪風に近づいて行く坂井には気が付かないでいた。舷門に立つ当直兵も、むしろ棒槌銃までして出迎えた。そこで辺りを見回して気が付いた。洞窟は口が開いていて、艦がいる区画は甲門で区切られているが、その先は海で、水路の向こうは明るくなっている。水平線も見える。

??????????

彼女は若宮の「来訪」を知らないが、その時以上に驚きと疑念を抱いた。

彼女は、初雁達の「心電写真」を知っている。だから雪風に「乗員」がいる、その事自体には今更驚き覚ええない。が、しかし、それが実体化していて、しかも「バグ」であるはずの自分を拒まない。正当な「継承者」つまり幹部であるはずの初雁達の前には姿を現さなかったことにも疑念が残る。

自分を拒まなかった事についてはすぐ疑念が解けた。舷梯を登りきるか否かのうちに、艦橋の方から水兵が一人駆け出して来て、坂井を出迎えたからだ。

「坂井法子様ですね」息を弾ませながら水兵は敬礼した。「お待ちしております。如月大尉はもう士官室でお待ちです」

瞬時に坂井の頭の中で警報が鳴り響く。はめられたしかし同時に、初めて聞く優しい女性の声もした。

「お行きなさい。私がついています」振り返ってみるが、別にそれらしい影はない。再び声がする。

「あなたはこの為に来たのでしょうか？」ままよ。彼女は出迎いの水兵について艦内へ入って行った。

入試で上京しているはずの如月まどかは、確かに士官室にいた。

「よく来てくれたわね」彼女は人なつこそうな笑みを浮かべて坂井を出迎えた。

「コーヒーを二つ」水兵がうなずいて、士官室を出る。如月は濃紺の、細かい十字型の模様が散っているモンペ姿であった。胸の名札には「帝國海軍女子挺進隊 如月まどか」と墨で書かれていた。住所も書かれているが、東京に岡田などと言う区が有ったかどうか

か、和歌山出身の坂井は知らない。そう言えば名札の字は全て旧漢字だ。

「一体これは…どういう真似ですか」坂井は警戒を微塵も解かず口火を切った。「先輩は上京していたはず…それがどうして、ここで、こんなことを。それにあの人は一体」

「坂井さん、あなたは今時間の流れを超えているのよ」如月は落ち着き払っていた。「今は昭和20年5月1日」

「馬鹿にしないで」坂井は即答した。「タイム・スリップだなんて漫画じゃあるまいし」

「信じる信じないは自由だけれど、事実よ」如月はあくまで冷静だった。「前に言ったかしら。この艦は私の物…いえ、これは春日さんに言った事だったわね」

「一体何を…」
「落ち着かなくちゃ。主導権を握られたら、負ける。今はまだお互い敵の後ろを取ろうとしている段階はずだ。」

この艦があなたの物なら、知っているはずですよ」坂井は本題にすぐ持ち込む事にした。早く艦に飛び込んで、敵の狙いを知ろう。「私のこの艦での立場は一体何ですか」

「坂井さん、あなたはこの艦に、直接の関係はなかった」如月は幾分哀れみを含んだ目で坂井を見た。「扶桑の子に、二式大艇を見せられたはず。あなたはそっちを引き継ぐ者なのよ。本来、雪風には何の関係も無い」

その事は忘れてはいなかった。直後に扶桑が死にかけたからでもある。

「雪風と、あの大艇…そのどちらもが、海軍の極秘研究のテスト・ベッドとして使われる事になっていた。大艇は新型爆弾の搭載機として。今海軍が持っている飛行機で、あれだけパイロットがあつて、しかも敵弾に撃たれ強い機体は無い」

「では、日本は原爆を…」

坂井が確認の意味も込めて問いかけた時、ドアがノックされた。水兵がコーヒーを持って来たのだ。口にすまい、と坂井は心に決めた。この状況下での饑餓は余りに危険すぎる。またさっきの声が大丈夫ですよと言って来たが、無視する事に決めた。

「その通り。日本でも満州奥地のウランを原料に、原子力の利用についての研究は戦前から進められていたから、爆弾を作る事についても理論的には可能だった。でも、制作に要求される技術力を持っていなかった」

如月は目を伏せた。「日本はいつもそうだった。理論は列強と肩を並べていながら、それを実行する能力が欠けている。でも、ようやく去年の暮れに一発だけ、手にする事ができた。終戦には間に合わなかったけれども」

「5月1日なら、終戦はまだですよ」勝った、と思いつつ、坂井は指摘した。「馬脚を現すって、」

「釜山からの海路で敵の潜水艦に艦ごと沈められた。多分潜水艦側はそうとは知らないでしょうけれども、如月はたじろぎもせずやり返した。」

「それに私は元々、この時代の人間…あなたが知っている如月まどかは、虚像よ」

??????

「幽霊、と言った方が早いかしらね」少し話を合わせて見よう。その方が真相を探れそうた。絶対に決定的な矛盾を見つけやう。坂井は作戦変更を決心した。矛盾と言えば、今までも矛盾だらけのはずだけど。

「海軍が実行していた極秘計画には、もう一つ有った。米軍に圧倒的に水をあげられていた電子

技術をカバーする為に陸軍と共同して手を出したのが、人間の脳をそのまま電子回路として使う事だった」

その刹那、坂井の脳裏にあの悪夢が鮮明に蘇り、彼女は軽い目眩さえ覚えた。

「そう、あの夢は見てのわね。私が見せたのだから」如月はあごの下で手を組み合わせた。「その技術にしても、日本は8割がた物にしていた。あとは安定した活動を得る事と、できるだけ活動状態を長続きさせる事だけだった。装置が大きくなる事は、もともと船舶搭載用電探と火器管制装置を目的にしていたから、大目に見られていた」

「何となく先は予想できた。」

「そしてテスト・ベッドに用いられたのが、この雪風」やっぱり。「大淀で軽巡クラスの使用評価を行った後、駆逐艦クラスではどうかデータを取るのが目的だった。効果は抜群だったわ。あの菊水作戦でさえ、敵弾を一発も命中させなかったのだから。寺内艦長の操艦も見事だったけれども、私が火器管制をやらなければ、多分大破は免れなかったはず」

「じゃあ何でもっと沢山作ら」

坂井は自分で言っただけでハッとされた。何て恐ろしい事を如月も首を横に振った。

「また、日本の工業技術が邪魔をしたのよ。どうしても必要な精密工作ができなかったし、脳外科医も戦死したり応召していたりで充分集められなかった。あとは後世の為に基礎データ蓄積が目的の実験だけが残されているわ」

しばしの静寂。これほど重い沈黙を、坂井はまだ体験した事が無かった。

「でも、それで良かったのかもしれない。日本はバンドラの小箱に手をつけてしまった。アメリカが閉じてくれないければ、今頃私達はもっと凄惨な歴史を経験していたはずよ」

如月が言った。「…チャンスかな。坂井は思い出したように、もう一つ問いかけた。

「さっき水兵さんが、先輩の事を大尉と言っていました。体」

「所属上、私は上海特務機関の大尉って事になっているのよ。私だけじゃない。この実験に脳を提供する人はみんな…そして私の手術は、明日。最後の脳を提供する事になっているわ」

よろよろとドアへと立ち上がり、そこで耐えきれなくなって坂井は廊下に思い切り吐き戻した。こんな、こんな残酷な事が許されていいのよ。ホラー映画だってここまでやらない。吐きながら坂井は、初雁の寝言を思い出した。バンドラの小箱。初雁もこの事を知っていたのかな？

しばらくして落ち着くと、取り直してテーブルに戻り、浅く息をしながら更に問いかけた。

「何でこの艦は…こんな所に？」

「安全に実験を継続する為」如月はそれまでと同じように即答した。「原案はドイツ海軍がノルヴェーのフィヨルドに持っていたUボート・ブunker。ここなら空襲は心配しなくてもいい。それに相模湾は遠浅だから、潜水艦の進入もそれ程心配しなくてもいい」

一呼吸置いて、彼女は続けた。

「実験が済んだ後、この洞窟は入り口を爆破して封鎖して、記録から抹消される。いつの日か日本人の足跡の証明として姿を現す、その日まで！

「そんな事をして…本土決戦はどうする気？」

如月が苦笑したような気が、坂井にはした。

「四方を海に囲まれた我が国の本土決戦とは即ち、敵の本隊を城の本丸に入れる事に等しい。そんな戦をやらなきゃならない様なら、日本はもう負け

じゃない。陸軍は今になってなおその事が解らないけど、戦争を続けるにせよ止めるにせよ、もはや海軍に出番はないわ。第一、戦う為の油も、弾さえも、もう無いし」

…と、突如、扉の外で含み笑いが始まった。坂井が聞き慣れたその声はすぐに高くなり、最後には哄笑へと変化した。

「誰だ」如月は驚きの声を上げた。「出て来い」
「あつは…いやあ、全部聞かせてもらったよ。幽霊たあ上等だ。この俺様もそこまでは考えが回らなかったぜ。虚像か。それもおもしろえや。じゃあ何かい、この傷も虚像？いつか忘れた頃に消えている？」

士官室の厚い木製の扉が荒々しく蹴り破られた。「おうあの日あの晩あの場所で、見事に咲いた緋牡丹一輪、まさかてめえ見忘れたたあ言わせねえぞ、おおう」

戸口で仁王立ちになった宇垣は、そこでもはやどうしようもなくたびれ果てた一種制服の胸を豪快にはだけた。ワイシャツから弾け飛んだプラスチックのボタンが床で乾いた音を立てる。鎖骨の下、右寄りのあたりに丸くくっきりと肉が盛り上がっている。ところどころ解れの有るサラシの右胸は奇妙に平らだが、原因を聞くのは野暮というものだろう。

「おう、あの時俺はすんでの所で三途の川を渡りかけたんだ。医者がヤブだったら今頃とつに閻魔様に仁義切ってる所でえ」

如月は明らかに狼狽していた。宇垣は構わずまくしたてる。

「貴様が幽霊かどうか、んなこたあどうだって構やしねえ。一つだけはっきりさせてもらうぞ、貴様雪風の一体何だ」

如月は士官室の反対舷側に有るもう一つの扉から、おもむろに回廊に出た。

「待てよ」

宇垣が後を追う。坂井もその後に続いた。

「私こそ雪風そのものを守る者」如月は多少狼狽している風だったが、それでも高尚さを失うまいと努力していた。「昭和17年、ミッドウェイで大敗を喫した直後に応召して以来、私はその為だけに生きてきた。これからも、ずっと」

「チィちゃんを殺してまで」

坂井はようやくと反論したが、相手にされなかった。

「50年以上も…その戯言が本当なら…そんなに長いこと雪風の側にいてまだ判んねえのか、大馬鹿野郎。今の…俺達にとつての今だぞ、今の日本を見れば判るだろう。あの時この艦をここに隠したエライさんたちが夢見たような時代は、これから100年経っても来やしない。アメ公とタイマン張った事だつて知らねえ奴等が多いご時勢だぞ」宇垣の表情は見る見るうちに赤黒くなって行った。

「第一、俺達はそんなガラクタが無けりゃ昔の事が思い出せないような、そんな情けない奴等なのかよ。いや、三笠を見てみる、ガラクタが有ったって昔の事なんかこれっぽっちも思い出せねえんじやねえのか？雪風もこれ以上無駄に長生きするのは望まねえはずだ。いつまでもただこねてつと、この俺様が力づくでもこの雪風吹っ飛ばさず。魚雷はまだ生きてるんだからな」

如月の目が薄く光つたのを坂井は見逃さなかった。

「蛮族」

「蛮族大いに結構。乱世の奸雄つても乙なもんだ」

宇垣はなお力任せに應對したが、

…ん？！

突然すべてが凍り付いた。唇が真一文字になり、両の眼がクワと見開かれる。

「山城…てめえもか…」

強ばった彼女の視線を追った坂井は息を飲んだ。いつの間に見れたか、宇垣の腹心のはずの山城が妙にかがんだ姿勢で背後に立っている。宇垣の両足に赤い物が伝い、足元には早くも池ができて始めた。彼女は一瞬よろめいたが、懸命に踏ん張って耐えた。恐怖で坂井は声が出なくなった。

「あなたが新しい雪風の継承者と知ってから5年間。長かったわ。…本当に長かった。勇気の木刀を持つ者、それがこの雪風の命運を決める。他の者はアイデアを出すだけ」山城は誰にともなく呟いた。「あなたが栄光ある雪風を台無しにしないか、私はただそれだけを気にしていた。だからこそ、あなたの側についていた」

坂井はその時ぼんやりと、関羽と張飛になぞらえられていた二人の中の良さを思い出していた。このコンビが無ければ、今の様名「提督」先輩はいなかったはずだと、学校内では良く知られている話だ。

「全てはあの神器が初雁たちに引き継がれた時、狂い始めた。船室の巴御前の意志が本来とは違う方向へ向く様になった…あなたは様名が引き継ぎの話を持ち出した時、やはり賛成するべきではなかった」

「馬鹿な!」宇垣が呟くように反駁する。「数珠を持つ者こそ艦長、艦長の言う事が即ち雪風の意志のはずだ!」

だろうな、と坂井も心の中でうなずいた。第一様名は「艦隊」のトップで宇垣の姐貴分だ。宇垣が彼女の提案をそう易々と否定するとはちよっと考えにくい。

「いいえ、雪風の意志は雪風の意志」山城は刃を更に深く捻り込みながら、首を振った。「私達はその為の助言を行うに過ぎない…聖上の誤りは臣下これを正さざるべからず」

「貴様…」宇垣はうなった。「聖上の誤りって一体何だ」

「そんな事も知らないなんて」山城は柄から手を放した。そして続ける。「私があの実験の一人目で、私があの木刀に宿る魂。私に誤りはないわ」

「いい加減にして!」坂井がたまらず絶叫した。

「じゃあ私は一体何なの!」

如月、山城、宇垣さえもがその気迫に一瞬だざぎよとなった。

「魂だか幽霊だか知らないけれど、私は迷惑よ!どっか他でやっで、他で…私を巻き込まないで!」

こぼしの静寂。破ったのはまた如月だった。「全ては栗田たちが御前をあのはったりでたぶらかしたのが原因だ。我々はその過ちを正す為に血で賤わされているに過ぎん」

「アホ…それでこんな事を…」腹の底から絞り出されるような、かすれた声が士官室に響く。一瞬間を歪めつつも、宇垣は自ら小刀を抜き取り、放り捨てた。「この程度で利くってか…ここに来やがれよこた!」

彼女は胸元の傷を指し示した。銃声がして、胴体に深紅のつばみが乱れ咲く。それでも宇垣の姿勢は揺るがない。見ると如月の右手には、どこから取り出しのか、自動拳銃が握られていた。ペーパナンプだったっけかな。無関心な考えが坂井の脳裏を過る。

「弁慶のつもりか…」

如月はふたたび坂井に向き直った。気が付くと宇垣は白目をむいている。

「なら好きなだけそうしていいわ。さて」

如月の銃口が自分に向けられるのを、坂井はもはや無感動に眺めていた。

「少し長居が過ぎた様ね」

ぐ、と引き金が力が入められるのが目に入り、これまでかと思った矢先、眉間がぱっと明るくなって如月が目を覆った。

「おーっとこれはどうした事でしょう!」やかましく響く声はどうやら聞き覚えがある。「これはまるで、秘密基地ではあーりませんか!」

坂井が手をかざしながら光の方を見やると、ビデオカメラを持っているのが一名、カメラの前にマイクラしいの持っているのが一名、カメラの後ろにはサーチライトみたいな者——これが光源——を持っているが一名。性別までは判らない。

「洞窟を探検していたら、こんなものを見つけてしまいました!どうしましょう!」立て板に水とばかりまくしたてているのはどうやら女の子っぽい甲高い声だ。関西訛りがあるのは気のせいだろうか。

「おや、あそこに有るのは駆逐艦のようです!早坂探検隊、初回にしていきなりの大金星のようです!」

こちらが一同唖然となっている間に、取材陣は艦内に上がって来た。魚雷発射管の辺りでまたがやがややり始める。坂井達にはまだ気が付いていない。

「これは魚雷のようですね。(コンコン) なかなかいい音がしています」

更にラッタルを上がり、第二煙突に設けられた機銃座で、25mm三連装機銃をいじり始める。…と、何かの拍子に機銃は息を吹き返したかのように弾丸を岩崩に送り始める。これには彼らも驚いたが、もっと驚いたのは如月達である。

「…どうやら本物のようですね」アナウンサーの声も少し震えている。

「やめろ…」

如月がうわごとの様に繰り返すのに気が付いた坂井は、とっさに如月に飛び掛かり、手から拳銃をもぎ取った。如月は反動で甲板にもんどりうって転がり、しばらくそのままになった。山城もぼろろとしていて坂井を止められない。拳銃は簡単に坂井の手に落ちた。

「動かないで!」

弾が残っている事を祈りつつ、彼女は銃を二人に向けた。弾みで引き金が引かれ、暴発する。こんなに簡単に撃てる事と、その反動の強さに、坂井は二重で驚いた。これはよほど気を付けないと却って危ない。取材の一行が銃声を聞きつけて注意をこちらに移す。何事かわめいてラッタルを駆け降り、彼らの所へ走り出した。

「カメラか!」

如月が寝返りをうち、呟くのがわかった。「思えば我々は、始めから終わりまで低俗なマスコミに悩まされ続けた…」

そしてうつぶせのまま、急にぐったりとなった。嫌な予感がしてひっくり返してみると腹が横一文字に割かれ、だくだくと血が流れ出している。

「陰腹…」坂井は再び込み上げた吐き気を必死で堪えた。「いつの間に!」

坂井さん、早く麻美を病院に!」山城の声がする。カメラはすぐそこまで迫っていた。「まだかはこっちで何とかする!」

「自分でやっでおいで何を!」

坂井は言い返したが、山城の気迫はそれ以上だった。放っておけば宇垣は確実に死ぬ。言い争っている場合ではない。彼女は宇垣を背におぶり、徐々に背中がぬるぬるとして来るのを感じながらも走り出した。カメラは山城の所で食い止められた。

ドックの出口で振り返ると、山城は記者の取材をのらくらとかわしながら、ポケットに突っ込んでいた手をおもむろに頭へやった。

ああ、やるな。

思うが早いのか早い銃声が一発轟く。

続いて彼女の身体がスローモーションのように崩れ落ちた。

「あれが奴らの最期とは思えねえ。」

坂井の背中中で宇垣が呟くが、坂井もそれを否定する気にはなれなかった。

それからどこをどう走ったのかはおぼえていない。洞窟の途中で背中が軽くなったので振り返ると、いつの間にか宇垣の姿が消えていた。落としたはずはない。まさか、宇垣さんまで幽霊？

彼女の疑いを打ち消すかのように、またどこからか声がした。

「麻美の事は任せなさい。あなたの手には余るでしょう。それに私の始末は、初雁さんがつけてくれます。もう、ここには来ない方が良いでしょう。」

もう、どうにでもして。心身共に疲れ果てた彼女は、そのままその場を後にした。

私の始末？てことは、あの声は、雪風？

そういう事にしておいた。そうすれば一応筋が通る。

例の取材は、いつまで経っても表には出てこなかった。

山城も、それから二度と姿を現さなかった。

数日して宇垣は帰って来た。結局傷そのものは大した事はなく、数針縫っただけで済んだのだそうだ。続くようにして上京していた榛名たちも戻って来た。

榛名が帰って来たとき知った若宮は即、彼女の部屋にすっ飛んで行った。この学校で「本物の」軍艦についてまともな話が、それもかなり突っ込んだ話を期待できるのは彼女くらいのものだ。

寮で彼女の私室を訪ねると、彼女は南雲と一緒に、両方の頬に大きなカエデをこしらえていて、始終痛そうに押さえている。すぐに若宮の後ろから初雁が現れた。

「榛名先輩、アンメルツ持って来ました」

「ありがと」彼女は液体湿布薬の小瓶を受け取ると、まず南雲にすすめてから自分の患部に塗り付けた。『あ痛』

「あの、どうしたんですか？」

「宇垣にやられたんだよ」南雲が答えた。「余計な事すんなって、こんな早くばれるとはね。ま、仕方ないけど」

？

榛名が解説する。要は「桃園の誓い」を実行したに過ぎない。

呆れながらも若宮は彼女に雪風の事を聞いて見た。初雁も含めた3人は「雪風」の名前が出て来た途端、互いの様子を探るようにそわそわし始め、若宮を正視しなくなった。

「何で雪風があんなところに有るんですか？」

「先輩、あそこってちゃんとアイテム持っていないと入れないんじゃない？」

「ごめん、騙してたのは悪かった」榛名が手を上げて謝る。「出入りすること自体は不可能じゃない。ただものすごく面倒なだけ」

「あそこには幽霊が居るのよ」南雲が引き継ぐ。

「巴御前だけじゃなくなってるね」

榛名は雪風の「秘密」について語り始めた。

大筋は艦長や如月が話したのと同じだから割愛する。さすがに継承者うんぬんは全部省かれたが、が、榛名たちがその事を知る由は無い。話のあまりのスケールの大きさに、若宮は軽い目眩を覚えた。

「あの洞窟が迷宮化したのは、海軍でも意図しない事だった。巴御前によればその実験で犠牲になった人達の魂が自らを封じようとしたらしいんだけどね。雪風の存在を秘匿するには絶好の事件だったけど、今度は海軍自身も雪風に手を出せなくなった。そのうちに記録は埋没して、海上自衛隊でも護衛艦『ゆきかぜ』と紛れて忘れられた存在になり、今にいたる、いい事なのか、それとも悪い事なのか、わからないわ」

「でも、よくあなたあの洞窟の存在がわかったわね」

南雲が顔にアンメルツを塗りながら尋ねる。

「偶然ですけど、私のパソコンで、洞窟のデータが手に入ったんです」若宮は正直に答えた。「あのデータだけはプロテクトがかかってなかった」

「私、そっちの方はまるでわかんないけどさ」榛名は珍しく負けを認めた。「それも多分学校の方があんまり価値を認めなかったんじゃないかね。あるいは雪風の意志かな」

しかし若宮にとっては、雪風が「何故」あそこに有ったのか、それが判っただけでも収穫だった。

雪風の始末って、どういう事？

何度となく初雁にたずねようとした彼女だったが、できなかつた。「のっぺらぼう」が怖かったのだ。あの時の山城を見てしまうと、仲間と言えど安心できない、そんな警戒が先に立ってしまうのだった。

だが卒業式が済んだ後——如月と山城はついに現れなかつた——何となく気持ちの整理がついた彼女は、初雁をつかまえて単刀直入に切り込んだ。

「来ればわかるよ」

初雁はそれ以上答えようとせずに、彼女を女子部校舎の屋上に連れて行った。菅原が既に待っている。

下を見ると、校庭まわりの遊歩道で卒業生と在校生が入り交じり、最後の歓談を楽しんでいる。目を転じれば相模灘は波穏やかで、湘南特有の穏やかな春の日差しにきらきらと光り輝き、水平線では定期航路の船舶が行きかっている。

ああ、平和だ。

なぜ自分がここにいるかを一瞬忘れて、坂井は潮気に満ちた空気を一杯に吸い込んだ。と同時に思い出した。雪風は、この平和な光景を見守る為に、今まで生きて来たのだろうか？たしたらもう、もういいよ。理由はどうあれ、私達はもう戦争をしない。戦争ができない国に、この国はなってしまうている。いい事なのか、それとも悪い事なのかは、判らないけれども。

ふと見ると菅原も同じ考えなのだろうか、少し錆び始めた鉄の手すりに半分もたれ掛かり、腕組みして遠く太平洋をじっと眺めている。

アーティと朝比奈が連れ立って現れる。

「いよいよだね」

菅原が腕時計に目をやり、裏山へ向き直った。

唐突に、

辺りに落雷のような大爆音が響き渡った。音がして来た方を彼らが見ると、裏山のふもと、ちょうど部室棟の工事をやっていた辺りで、どす黒い煙が噴き上がる。衝撃波は彼らにも襲いかかり、そちらを向いていた校舎の窓ガラスが次々に音を立てて割れて行く。赤黒い爆炎がもくもくと立ち昇り、様々な破片が舞い上がる。舵輪とおぼしい木片が彼らの足元に降ってくる。ボーリングの太い柱が鉛細工のようにゆっくりと崩れ落ちていくのが、彼らの目にも入る。

初雁がゆっくりと手を挙げ、海軍式に敬礼した。菅原が、朝比奈が、アーティが、そして坂井が自然とそれに倣う。

それが雪風の長い——長い航海の果てだった。

彼らは後で知った事だが、この爆発による地上での死者は一人もいなかった。地割れができ始めた時点で作業員達はさっさと避難してしまったのだ。地質調査圧が来るのを待とうとしたその矢先、突然地盤が陥没して、大爆発が起きたのである。

不明の点はいくつにもおそろしく、おそらく地下にたまっていた水蒸気が爆発したのだらう、というのが調査団の結論だった。温泉地など火山帯が走っている地域では湯元になりきれなかった水蒸気が地中にたまり易く、工事など何かのショックで一気に噴出して死者を出すケースは過去にも無かった事ではない。

陥没したところはかなり入念に調査されたようだが、菅原達が知る限り、船の部品はおろか人工構造物が在った証拠は何一つ見つからなかったのである。

真実は、その場の者しか知らない。
真実が真実かは、誰にもわからない。

MANAZURU SCHOOL SAGA
"YUKIKAZE" THE END.

校長室 (その1)

雪風篇も今回がラスト。皆さんお待ち遠様。そして、お疲れ様でした。特に「イロ」系を狙ってセッティングした方や不幸にして参加のタイミングが外れた方なんかは動きが取れなくて大変だったろうと思います。イロにはイロなりの「魚道」を用意してあったつもりですが、それをこっちで言っちゃ何にもならないので黙っていました。この辺がミソなので今後も黙ってますが、意図しないところで場外ゴロホームランを放っちゃうのが(つまり天然ボケをかますって事ね)イロのイロたる由縁だと、ネットゲームで「イロの中のイロ」(知る人ぞ知るエド・ムラサキ及びバイオレット・カラード)を見てしまった私は思うのですが、どうでしょう。

菅原君のプロポーズについて。これは本来「雪風の最期を見届けた後で」と明示的なメッセージ

が有ったのですが、こちらとしては「雪風の最期」でシメたいと考えていたので、意図的にタイミングを変更しました。でないとなら雪風の存在が急に希薄になりそうで、ね。かと言って次回送りにすると何時になるかわかんないし忘れそうで、大目に見てやってください。

それから今回、本編の「艦隊派」と「ブルーシード」の奇稲田一族との関連を指摘する声がありました。私としては「絶対に有りません」とか言っても誤解されるんじゃないかと(この手の事は強調すればするほど怪しくなる)私がブルーシード初めて見たのは年が明けてからで、それよりずっと前に雪風の「引き継ぎ」は行われてたじゃありませんか?()

さて、起承転結も次回からとうとう「結」です。昔の「イロも動き易い」ところへ戻れるでしょうか?ちょっとドキドキもの今日この頃です。

プレイヤーの声

Q:あの夢、もしや「新・真鶴」への伏線?まさかとは思いますけど...

A:...どこ。(←ゴウゴウガガガガガガガガガ...) いえ、んなことあ、無いです。無い、と思います。無いといいなあ。いや、今「新真鶴」へつなぐにあたって、正直に真鶴からのタイムスリップネタを使っちゃおっかな...などと考えてるので、万が一気が向いたらそんな事もあるかもしれませんね。なかなかいいアイデアです、いただいております。

ちなみに仮称「新真鶴」ですが、木俣滋郎著「日本海防艦戦史」(図書出版社・A5ハードカバー 税込¥2884)は副読本として推奨しております。できれば目を通しておいってください。

校長室 (その2)

長かった。...本当に長かった。たった一ヶ月肉体労働に従事するだけで、こんなに自分に余裕が無くなるのは、考えても見なかった事です。4月に入ってから、いや、研修が始まった2月末から真鶴を含めてBlowに従事していたのは正味一週間も無いでしょう。

最近はまだ以前自分がこの本で何をしていたかも時々思い出せなくなる始末。そろそろ限界かもしれません。

ですが、某都知事じゃありませんが私は言った事にははじめをつける主義(時々崩れるけど)です。何とかゲーム時間9月までは続けましょう。それがこのゲームに参加したキャラクターやプレイヤーへのせめてもの手向けだと思っております。

前にも言ったとおり、たとえ年刊になったとしてもこの本自体は続けたいと思っております。今でもその考えは変わっていません。

それではまた次回、お会いしましょう。

三等雑居室

流浪人。

★そう言えば報告が遅れましたが私も何とか五年生になれました。なのに職場にも通ってます。「非常勤」の肩書き付きですが。講義が有る木曜日の午後だけ学校に行ってます。あとは気が向いた時の土曜日午後とか。近在の方で余裕が有ったら駒澤までお越し下さい。積もる話は山と有ります。多くは年寄りの戯れ言って気もしないではありませんがね。

(海軍主計少佐)

☆いやあ、とにもかくにも、ようやく春が来ました。と言っても第一志望に受かった訳ではなく、第四志望で妥協した結果です。5勝2敗でした。で、SF研に顔を出したりしてますが...SFやってる人が居るのかいないのかわかんないような所ですね。

NEO-GEOはあるわ、スーフファミはあるわで毎日サムズ大会。でTRPG、SLGもやってるとゆー、はっきり言ってゲーム研。おまけに隣のマン研と出入りが激しく、マンガも豊富。CGもやってる。何ともマルチなサークルでして...まあ、そこが気に入ってるんですが。

(東京都・日高耕)

菊：実に正しい学生生活（どこが）を送っているように慶ばしい限りです。しかし第四志望程度で気にしないように。3勝7敗で第0志望に受かってしまった私なんかはどうすりゃいいんですか、本当に。で5年生だもんなあ、笑うしかないわ、こりゃ。ワwww... ああむなしい。...ところでCGってどんなのやってる?できたら今度見せてよ。

笹本裕一。

☆笹本裕一はいいぞ〜、だから読むのだ(笑)

「妖精作戦」は最近再版が出たし、(でも絵は前ののが良かった)「スターダストシティ」は「妖精〜」の2巻と微妙に絡んで面白いわ(先に妖精の2

巻を読むと良)「ARIEL」も適当に下タバタしてて好き。

(神奈川県・遠藤誠)

菊：後に後輩に「ARIEL」見せてもらって、「ああこれはいかん」と思い、数頁で止めました。どうもノリについて行けない。歳食ったよなあ。

田中芳樹。

☆火浦功ほどじゃないけど続きが出ないね〜

銀英外伝の5、6巻、タイタニアの4巻以降、全14巻と言われたアルスラーンも未だ9巻までだし。既にストーリー忘れかけてます。

(神奈川県・遠藤誠)

菊：某新興宗教も無辜の市民苛めてる暇が有ったらこの手の悪質な連中何とかしろと思う今日この頃。

ゲーム。

☆バトテかあ...かれこれ1年近くやってないなあ...横浜の方は確実に一年以上行ってないや。去年の五月頃は渋谷の方へちょこっと行ってたけど。

何か格ゲーやらない派が増えてますねえ。私は相変わらず、やってます。今は「バーチャファイター2」「X-MEN」「ギャラクシー・ファイト」「KOF94」をやってます。「真侍」はどうも悪い点ばかり目についちゃって、ヤル気しません。特にバランスひどいよ。ちょっとSNK急ぎ過ぎたんじゃない?って思います。「真」のナコは既にただの「シニミのキャラ」と化してますから。シャルの方が絶対いいです。チャム2は問題外。キャラ的には嫌いじゃないけど、「サムライ」の雰囲気マルつぶれ。ま、この辺の事はあちこちで言われてますが...

(神奈川県・林孝始)

菊：バトテは...別件で3/21に一緒に行った京都の木村君とかはよく知ってますが、1月中旬に潰れたん

だそうです。あの時は本当に悪い事したね。どんなに混んでも桜木町行った方が良かった。

前回空廠でやった時に既に結構空いたので「こりゃヤバイな」と直感していたのですが、まさか、ね。だからあの時決行していたとしても、どの道でできなかった訳です。多分もう空廠主催って形でのバトル対決はないでしょう。秋葉原とか渋谷で「個人的」にやる可能性はまだ残っていますが...「呼ばれりゃ行くよ」程度の消極的なものですね。

☆VGについて。

ゲームタイトル画面のコンフィグにセレクトして、グラフィックをOFFにすれば、H画面はスキップする。隠しコマンドでゲーム画面を拡大するコマンドが有る。ゲームDISKのテキストファイルに書いてある。

Wing War

話題になってるWing War、三等雑居室だとフォッカーを選択する人が多いようですが、私は零戦を使っています。やり込んだ事もあって、今年の11月16日にドッグファイトモードでUFOを落とし、今年の2月7日にエキスパートモードでUFOを落としました。(どちらも1コインクリア) 零戦でもジェット機とUFOで苦戦するのに、フォッカーでUFOを落とす事ができるのでしょうか...

(神奈川県・遠藤賢一)

菊：そう言えば「VG」だか「VD」ってある病気の略語だそうです。海軍用隠語で言う「アール」なんです。女性読者もいるのでこれ以上は自粛。WWも勤めが始まってからはゲーセン自体が縁遠くなった事も有り(何つったって駅から職場まで遊び場といたらパチンコ屋が2軒だけ、あとは広大な畑かマンションばかり、)文字どおり完全にやらなくなりました。やれやれです。

振替乗車案内

福岡のPBMサークルで「Rex Net」って所が人集めやっています。「例え年刊になっても」という空廠の台詞は実はここからのパクリなんです。そういう示唆に富んだ活動をやってる所で、私は好きです。空戦ものと学園物がメイン、B5オフ100

ページ以上、送料人会金(ルール代)込みで¥1,100の無記名小為替だそうです。

連絡先は以下の通り。

〒830 久留米郵便局

私書箱60号

「Rex Net」編集部

菊地から聞いたって事を一言添えといて下さい。5月7日に4号が出るそうです。因みに創刊4年目だったりする(〜)

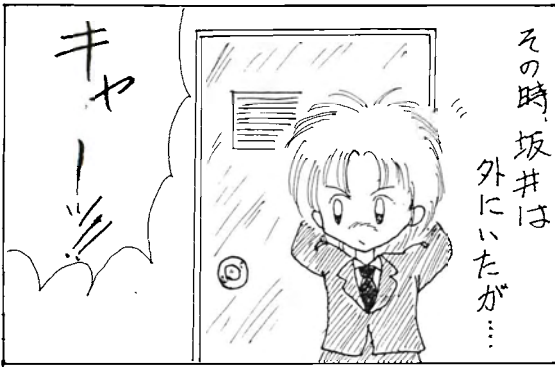
近況報告

3月20日の東京地下鉄サリン事件、4月19日以降の一連の横浜駅周辺の異臭騒ぎ等々、はたまた某新興宗教の一斉手入れあるいはそれに関連したコロシなど、私の周囲では立て続けに物騒な事件が起こっていますが、幸いにして私及び近い間の人間には何事も起こっていないようです。冒頭にも書きましたが私もめでたく5年生になり、うまくすれば「6334」なんて半端なものではなく「6336」ときれいな学歴を形成する事ができそうです。

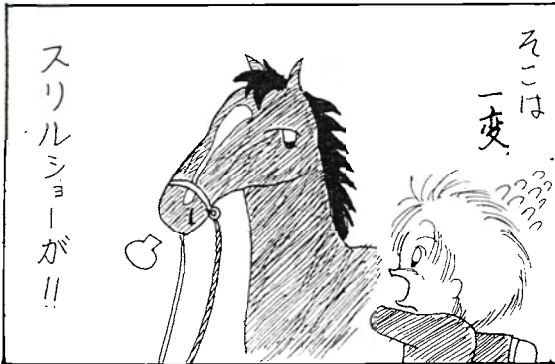
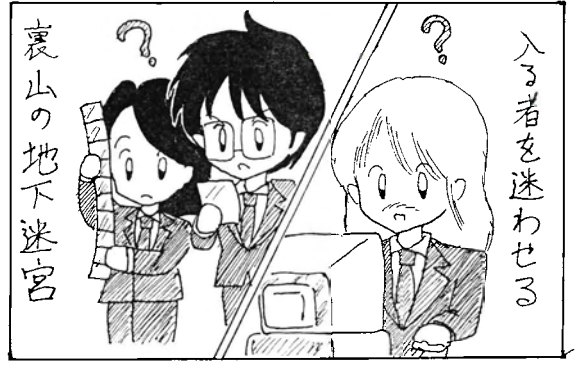
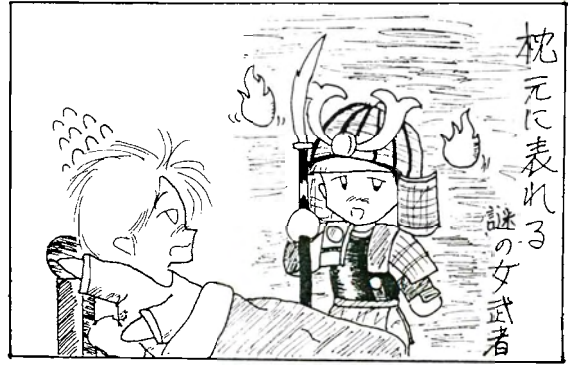
余話はさておき、国際問題。底知らずに見えた為替市場ですが、どうやら80円台で落ち着いたよう。公務員試験受かるか資格無くなるまで受けたい身としては早いとこ円安に(できれば150円台、せめて100円台)戻して欲しい所ですが、(だって普通民間に行く分まで来るから試験の倍率が上がる)一つだけ残念でならない事があります。

Power Macは一台約\$400なんだそうです。てことはですよ、現状でも¥32,000で驚くべき事なんです。\$1=¥50で¥20,000、\$1=¥1で何と¥400になってしまいます。凄くないですか、400円マクド。じゃないマッキン。そのうちマクドナルドで「バリュー価格」とか言って本当に¥400前後でPower Macが店頭で並んだりなんかして。(ないないない)初物買いでどんなに怖くたって、¥400なら買いますよ、Power Mac。システムはさすがに国産の(=高い)漢字Talkを買わなきゃならんでしょうが、それにしたって1万くらい、安いもんです。うーむ残念。

ABBBBBB△

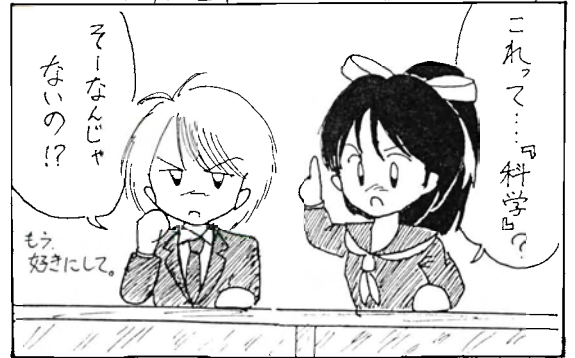


Blowでは「銃砲」と「科学」が勝利者



▲スリルショー 1987年仏産。4オムチャンピオン。

▲画面は開発中のものです。(資料も残らない)



心象風景①



ともってして
体当り
せざるを得ない
戦い
たとは!!



AS
体当りで
最終結
尾結!!
わあ

ド

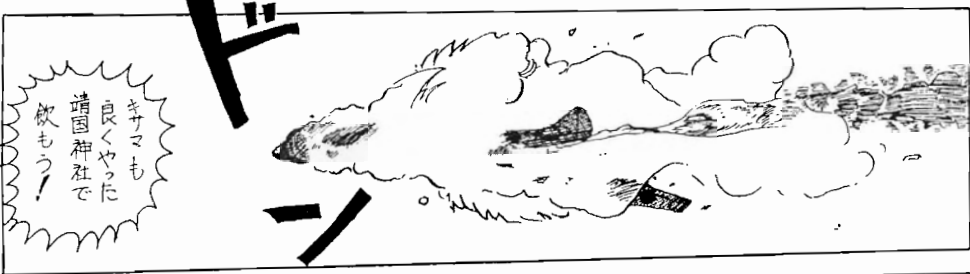
カッ



ミ……
皆の者
面目はない!!



最後の
護衛機も
被弾
して墜ちます



キマモ
良くやった
靖国神社で
飲もう!

ドン

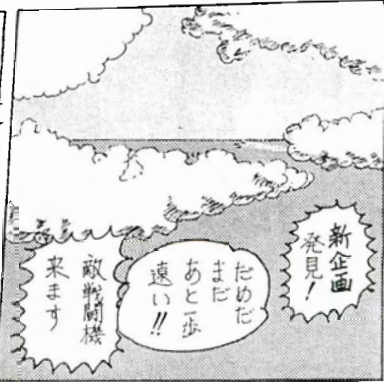


あ……
日の丸
日の丸
ッ!!



くそッ
新手か!?

左後方より
更に二番
異常に速い!

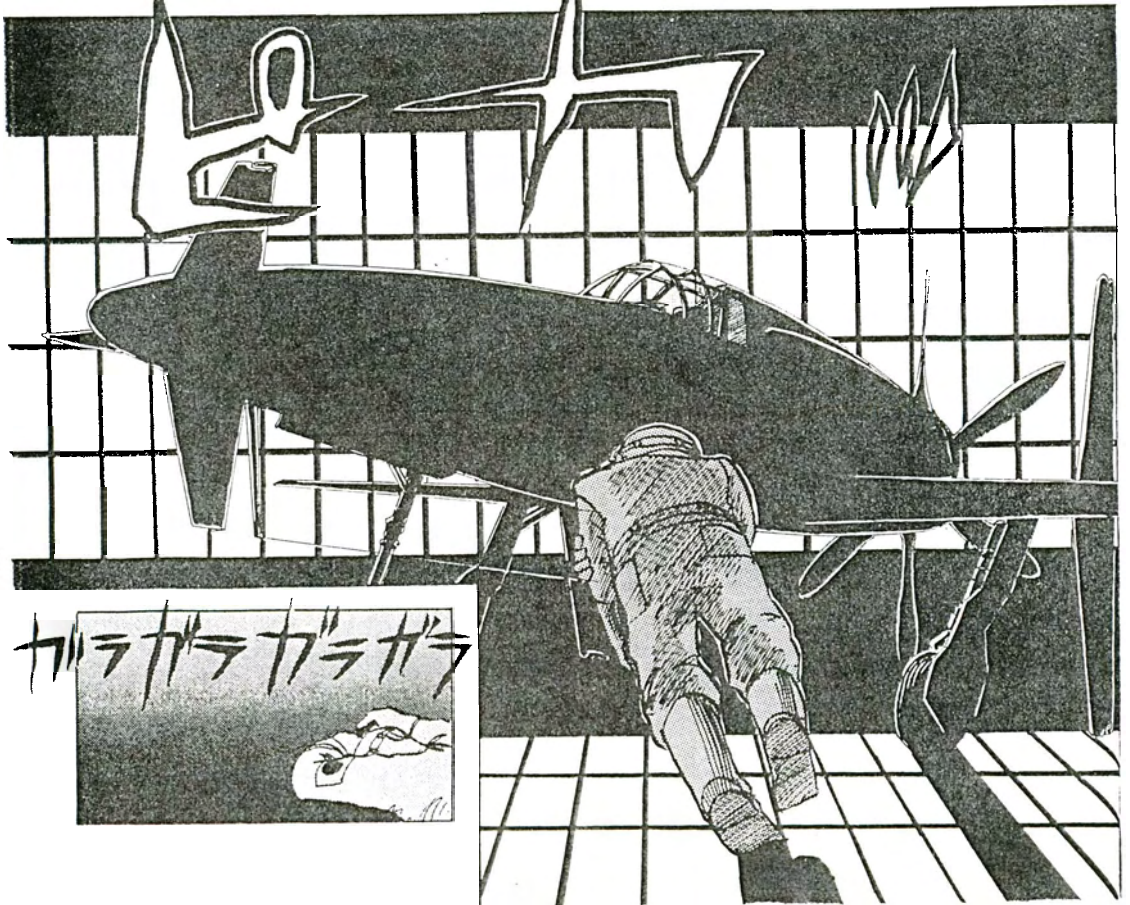


敵艦同様
来ます

ためた
まじ
あと一歩
速い!!

新企画
発見!

心象風景②



これは実話である(笑)

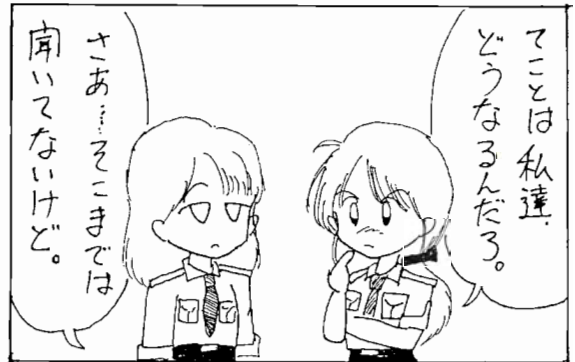
以上2編は....

ぬこにいプロダクツ

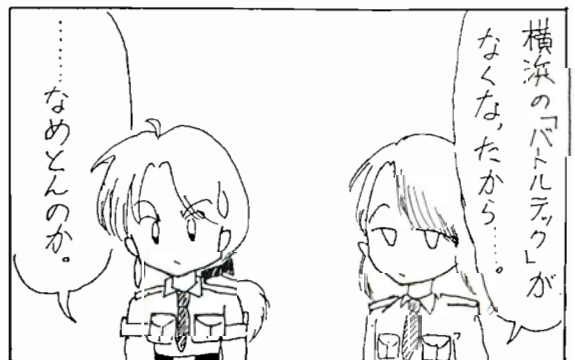
"MECHANIC LETHE 2"

より、抜粋してお届けしました。

主計少佐



▲おーい。どーすんだ。私はよ....



▲初めて聞いた時。スゴクたぞ。

最後に

少々早いのですが、これ以上傷が酷くなる前に手を打ちたいと思います。少し前FMが解散した折に、「これは全て予定の物であり云々」とオールナイトで言ってきましたが、それに近い物があります。大分前から言ってきましたよね、就職したらやめるよって。で、この間もFTが終わったところでBlowersはその航海を終えるって言いましたよね。青島都知事じゃありませんが、私は自分で言ったことには責任を取る主義の人です。今回でFTは終わり、Blowersも終わり、そして空技廠も解散です。

想えば、胎動期から数えれば悪夢のような10年でした。人集めは思うように行かず、着想は着手の寸前に他の所でもっと大々的に実行され、そして無理に実行に移した物はどれも中途半端にしかできない。突き詰めてみれば全て自分の力量不足でしかありません。皆さんにはこんないい加減な活動につきあわせてしまって申し訳なく思っています。

しかし別の視点から見れば、こんなに充実した、幸せな10年もないでしょう。ただのいじめられっ子でしかなかった非力な自分が、曲がりなりにも形になる物をこんなに長い間続けることができた。この間に得た物、仲間たちはきっと終生忘れられないでしょう。つまらない「鉄道おたく」になりかけていた自分が、外に向かって表現し続けられた。その価値には少なからぬ物があるはずです。

冷静になってみると、今までの私の人生は正に帝國海軍の歴史をそのままぞっているかのような感さを受けます。三流にすぎなかった自分が、理由はどうあれ私立中学に進んだ頃から(日清戦争)大きくなり始め、エスカレーターで高校に進み(日露戦争)30点の優遇処置のおかげで考えてもいなかった今の学部に進んだことで己を過信した。(第一次世界大戦)

この間に自信ほどではないけれども確かに自らの立場が進歩していたのは事実だと思います。「A-Strike」はさしずめ八八艦隊、「真鶴学園風雲録」は聯合艦隊でしょう。

バブル崩壊は正に当時の「ブラック・マンデー」(世界恐慌)に相当しますし、やがて就職戦線で惨敗を喫し(第二次世界大戦)自ら招いたことはいえ留年までして(原爆投下)、予期された自炊生活まで棒に振って今の福祉施設での非常勤勤務に落ち着く。(武装解除、降伏文書調印)

奇妙な一致と言ってしまうとそれまででしょうが、それにしても余りにも似すぎています。薄気味悪いほどです。私がかここ数年来、以前よりも熱心に日本の近現代史を調査しているのはそのせいでもあります。自分は一体どこから来たのか?そしてどこへ行くかとしているのか?誰も抱くこの疑問の答えが、そこに隠されているような気がしてならないのです。こんな事を考えるようでは、あるいはかなり参ってきているのかも知れませんが、自分の気が変になりにつつあることを意識しているうちは、未だ大丈夫でしょう。

サンフランシスコ条約が何時になるかは判りません。が、今までのピッチを考えれば、それはそう遠いことではありますまい。帝國海軍も形はどうあれ終戦後も警察予備隊の前から陰ながら存在していました。やがて海上自衛隊になる日を信じて、今をひたすらに生きたいと思えます。

「明日を見つめて今をひたすらに」これは我が母校、そして全てが始まった世田谷学園のスローガンでもあります。今、正にその心境です。

乗りかかった船、真鶴は終わりまできちんと続けます。新しい屋号は「日本国有鉄道横浜鉄道管理局」、「前例」通りに行くならば十年後くらいに黄金時代を迎えて、四十年は息が続くことになるでしょう。そんな明日を楽しみに。今号の最終ページは、そんな意味も含め、いろいろなメッセージを含んでいます。決して言葉面だけの薄っぺらな物じゃないことだけは断っておきます。

Thanks to: (順不同)

ただのりな 井村和正 AF.フィネクスレイ
EPST DARIUS・5 追木健 Damyan=Kizaki
竹篠理央 林孝始 YAWAGOLOU 安倍唯
洲上哲也 ゆきま 蔵田昌弘 岩嶋政好 セージ
謎の黒幕 岩屋口巧 GROUP AICOS あずち
大和楓 季里由紀
そしてたくさんの戦友達に

詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セシムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ万邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ意志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歲ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽クセルニ拘ラス戰局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ルモ而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪エ難キヲ堪エ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ有リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク拳國一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ

御名御璽

昭和二十年八月十四日

各國務大臣副署

真鶴学園風雲録に参加していた皆様へ。

空技廠のいきなりの「終戦」発表で皆さん面食らわれたことと思いますが、いかがお過ごしでしょうか。菊地は相変わらず職場で無間地獄体験ツアー中です。懲役1年と思って堪えてますがいつまで持つやら。

さて本題ですが、空前のブルーな状態でそれこそなげなしの「大和魂」をはたいて出したBlow最終号、「真鶴は続ける」と言っておきながらそのメ切を掲示しておりませんでした。発送後も半ば放心状態で何度も見返していたにもかかわらず、学校で先輩に指摘されるまで全く気づかなかっただけでもう斬首ものですが、今回はそのフォローです。

・ 真鶴学園風雲録 シナリオ# 2.5 (^^;) 「Succeed :」

戦争は既に教科書上の歴史となっていた。新しい世代は100年と経たない諸々の事柄をあたかも1000年前の事のように語り合い、そしてより短い時の流れの中に忘れ去っていく。

4月8日。6年ないし3年を過ごした者の後に続く新入生たちがこの日から真鶴の地で起居を共にするのである。ある者は寮の窓外の広大な相模灘に白らの期待を馳せ、またある者は初めて親元を離れる不安感を隠そうと努力し、あるいは隠しきれず生活の端々ににじませる。かつて自分も経た道ながら、あるいはそうであればこそ、先達は後輩を叱咤激励するのである。その中で生まれた親近感、連帯感は、卒業後も永く続くと言われる。

正門の真向かいでありながらなぜか「裏山」と呼ばれる、部室棟建設予定地で発生した「水蒸気爆発」の後、教職員にも異動があった。多くは「自発的」に辞表を提出した者だったが、例年に比べてその数は妙に多かったし、ごくわずかな定年者を除けばみな風紀委員会にながしかの形で関わっていた者ばかりというのも奇妙と云えば奇妙であった。どこからともなく、校長や理事長、学監が勅使河原一族の息がかかった者を免職したのだ、という噂が立った。噂はやがて定説となり、暗黙の了解となった。

風紀委員会も勅使河原規子が委員長であった3年前に比べればすっかり影が薄くなった。駆逐艦「雪風」を求めて暴走し続けた彼らは指導者を失い、肝心の「財宝」さえも失い、結束すべき理由を失ったのである。菅原絵馬はその光景を見るにつけ、雪風の存在と将来、を争ったのがもう何十年も前のように感じさせられるのだった。

「あれが奴等の最期とは思えない」

ただ一人の留年者、宇垣麻美はそう言った。あの時居合わせた坂井法子は彼女の回復後幾度かそれとなく真意を質したが、宇垣はまたしても答えをはぐらかして答えようとしな。ただ一つ彼女が明かしたことは、もはや周囲の誰もが敵に見えて来ることだった。宇垣の姿が日を追って痩せ衰えていくのは、その事も一因のように坂井には思われた。

井村真知子は、同級の早坂理絵がしばしば含み笑いのような表情を浮かべるのが気になり始めた。もともと早坂は何時でも笑っているような陽気な子だったが、今のそれは何かが違う。どう違うのか、それは井村にもわからない。有明にそっと打ち明けてみたが、彼女も「そう言われてみれば、・・・」と頼り無い返事しかなかった。

春日千明の「射殺」以来、いろいろな事が起こり過ぎていた。混乱の余波で「港」のDM船の稼働率は3割を切る日も多く、「スター」がいない今となつては6月に予定されていた小田原水産との「対抗戦」にも気が乗らないのが大勢である。何しろ彼らは、「本物の」撃ち合いを目にってしまったのだから、...

スターが求められていた。それもとびきりの。話題性に乏しい神奈川県西南端、と言うよりほぼ伊豆半島基部に位置する真鶴学園においては、新任教師も話題の一部ではあった。が今年はその数が多くて散漫になり易く、むしろ3日遅れで購買に並ぶ、あるいは翌日遅くに若い教師から「ヤミ」として入手できる週刊誌の方がよりウェイトを占めていた。しかしそんな中でそれなりに注目を集める先生も中には居る訳である。天然ボケであつたり、在学中はもろに反抗的であつたり（私学だけに、体育科以外の教師は9割9分卒業生である）どの教師もいわくの一つや二つは最低でもついているからだ。

中で一人だけ、何の噂も立ちそうにない女教師が密かに注目されていた。ひととき長い髪を真っ直ぐに後ろへ流し、ずっと下の方でバランスよく一つに束ねているのがシンボルマークのようになっていた。顔立ちは典型的「弥生人」で全体に細造り、まるで何かの巻物から出てきたようでさえある。新しく剣道担当として入ってきたのだが、真鶴の卒業生ではなく、日体大の卒業生でもないため（体育科は8割方日体大卒）「周辺情報」が全くリークされなかったのである。卒業生でもないのに私学の教員になる為には、経営陣のような「上層部」にコネがないか、あるいはよほどその方面で高い能力を示していなければならない。問題の先生は剣道部の人間も名前を知らないほど無名で、実際に授業を受けた者も「何であんなのがなれたんだろう」と首を傾げるほど、指導が要領を得なかった。かと言って「上」にコネが有りそうなようにも見えない。上品なのは確かで、男子部生の、年上に対するものとしては荒っぽい問いかけにもいつもにこやかに応じていた。

「どこかであの目、見た気がする」

初雁つばめは始業式から幾日も経たないうちに、菅原に打ち明けた。菅原も言われてみれば、どこかで見たような気がする。全体から受けるあの「気」のようなものは、ごく最近まで自分が感じていたような。...しかしそれがどこで誰から受けていたものか、その肝心なところは彼らにも思い出せないのだった。

その先生の名は、碓さくらといった。

(To be Continued)

何かもういきなりタネバレバレのような気がしますが、これが前回と次回との「橋渡し」です。今回アクションをかける際は「4月8日以後～月末」と考えて下さい。GWも視野に含めて構わないでしょう。

それから、既に参加している方でも、追加キャラの投入を一人だけ認めます。学年も好きに設定して構いませんが留年ネタはダメです。あと、今入れてるキャラをキャンセルして2キャラ同時エントリも不許可です。もうどうにも動きよう無いよって人は、NPC吸収も含めて別途相談しましょう。

それから業務連絡。早坂理絵さんはNPCとして接收します。ラストに向けて、そうでないと難しい位置づけにいますので。

参加切は7月15日。宛先はいつもの所です。